



ら、都市の多くの計画を決定していくプロセスは評価に値する。また上位に残った案はしばしば公開プレゼンテーションにより討議されるといい、そこにはオープンに計画を決めていこうという意思もみとれる。しかしここ東ドイツの計画におけるバラエティーなるものが、西側の人間によって形づくられてきた傾向にあることもまた事実のようだ。現在では次第に東の割合は増えてきているようだが、統一直後は建築、都市計画を問わず、豊かな経験を有する事務所の数は圧倒的に東は西に比べて少なかった。

旧市街地を観光とレクリエーションのエリアとして再活性化するためのひとつのプロジェクトとして、エルベ河畔の荷上げ倉庫の改修工事が進んでいたが、倉庫から生まれ変わろうとするそのレストランもまた、ベルリンの投資家の手にやるものであった(写真10)。

東の復旧は西の手によって進められつつある、という印象は否めない。またそれは間違いない事実なのであるが、東はもちろん西の買い手さえ全く現れない巨大ストックが厳然と存在していた。それはウィッテンベルゲを産業都市へと導いた、当時のヨーロッパの近代産業のひとつであった植物油工場跡である(写真11)。市では工業高校の誘致を狙っているが、その計画にも現実的な見通しは全くない。その姿を変えることも消すこともできないままに、無用の巨体は風雨にさらされ続けていたが、少しずつ前進するプロジェクトの周囲には、このようにいまだ手がつけられない状況が圧倒

的な存在で横たわっている。

街のいたるところにみられる空家と空地は、行政や再開発管理事務所の計画のそのほとんどが実現に至っていないこと、あるいはそこに至るまでの山積する困難な課題を物語っているのかもしれない。ドイツ都市計画の手法がそのまま通用しない、一筋縄ではいかない東の難しさに試行錯誤する様子が伺われる。

ウィッテンベルゲという小さな街が、自身の資源でどのように都市の魅力を構築していくのか。エルベ川という環境や歴史遺産、鉄道交通など恵まれた条件を備えているだけに、今後どのように都市の再生を果たしていくのか、数年後もしくは数十年後、もはや西の手から離れた独自の進化と発展を遂げているかもしれないこの小さな街にエールを送りたい。

ベルレベルク

……東ドイツの小都市を携える街……

歴史都市としての環境整備

ベルレベルクもウィッテンベルゲと同様に、13世紀に農業都市として誕生して

図3 ベルレベルク

